

付價

牙九号

都立西方山音韻

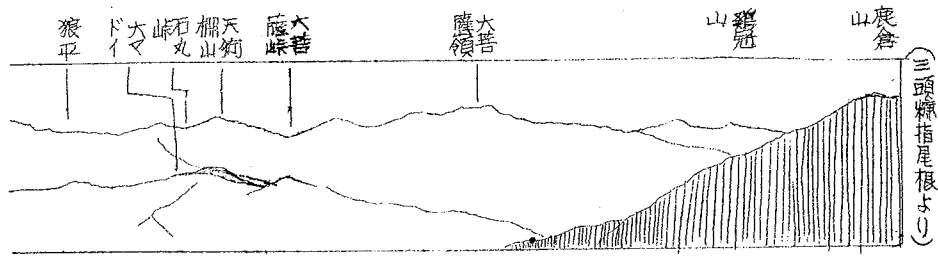
## 失敗

山行には必ず準備が必要である。準備あってこそこの反省があり、反省あってこそこの反省の確実あり、それあってこそこの進歩がある。そこに常に高きを欲するアルビニズムが生れるのである。

我々は、これを良いのだと云う時があつてはならない。反省会に於いてしばしば何れも其が、反省すべき其がないと云ふことがある。その段階に於いては満足すべきものであつても、更に一段高いレベルからは尺だらけに窮えるかも知れないのである。これに気が付かぬ時、既に進歩は中断しているのである。「失敗」と気がついて、更に次の段階への努力に入るとき、大いなる進歩がある。

こゝ云ふ意味で、「成功」は我々にとつて有難くないのである、完全な準備・研究の上に立脚しての、この極大意味の「失敗」を我々は常に持ちたいものである。換言すれば我々の山行と言ふものは、常に「失敗」であると言はれていたいものである。





部報「彷徨」第九号目次

▽東京都立立西高等学校山岳部 ▲

巻頭言

一年を顧みて、

部長 加藤 鈴夫

四

たわごと

編輯 平沢 勇

山行報告

公式 44回 セツ石山・報告

林 武志

六

反省

加藤 鈴夫

七

セツ石山に於いて

川口 和雄

七

45回 川苔山 報告

福田 繁三郎

十

反省

46回 多摩川南分水嶺縦走

西谷 徹

十四

A 隊 報告

高橋 忠正、高橋 有、西谷 徹

二二

反省

田中 英、加藤 鈴夫、中野 英司

二五

総評

田中 将利

二七

B 隊 報告

梶田 繁三郎

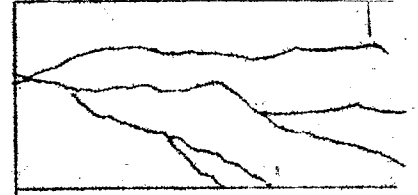
三〇

C 隊 報告

佐藤 忠友

三三

一、中



昭和廿七年度山行計画

公式山行47回

五月三～五日 新入歓迎山行

長瀬背陵縦走 } 歓迎会  
川苔谷百尋滝

公式山行48回

六月八日 勘七潭

公式山行49回  
七月中旬

南ア北岳又は東沢合宿  
(東沢合宿はトサカ尾根横断をかぬる)

公式山行50回 (公式山行50回記念)  
八月中旬

穂高廻沢合宿(八日間)

御嶽山行半旅行等  
七月下旬

富士山

公式山行納山

九月 未 定

十月 奥秩父主脈

十月 トサカ尾根横断

十一月 未 定

公式山行本山

十二月 又井一合宿

一月 雲取山合宿

二月 未 定

三月 奥秩父鷲冠尾根・甲武信

以上であるが変更の場合あり。

昭和廿六年度記録家成

とびらカワト  
後

伯人 送川谷洞行

御前山

五色スギ

赤根尾根

志願スギ

報告

報告

報告

報告

報告

平沢 勇

福田 二郎

岡谷 徹

下出 重彦

山口 雄弘

新島 洋子

藤原 康

九八  
九  
七

## 一年間を顧みて

遂に三年生が学校から消えましまつた。この間一年間何をしまつたか。本當にちやただしい一年であつた。そして最と充實した一年であつた。思はれぬに限りがない。四月。川苔山の集中。新入生を歓迎し部々團結をはかために行ゆれた山行。そして夏事に成功し西高山岳部に新機軸を作り前途に明るい希望をとらした。

五月。水無谷。ふせ返るほどの緑の中り清翠。夏の太陽の下に大きく胸をばつた。

七月。祖父杖縦走。山岳部発足以來の大山行。総勢三十人。その三十人があの原生林の中をどくどくとして歩き続けた。そして色々な経験と技術と知識を得た。

八月。一、二年だけでハケ岳へ行つた。自分達が計画し地図を見生活して無事帰つて来た。又月。丹澤集中。ムが変わつて不慣れなためか計画に弱気があつた。か皆山の築しを味つて来たことだ。十月。泉水谷。雨の中を皆良かん張つたし良く勿いた。

一月十。セツ石。春山に備えて雲取へ。目的地へは行けなかつたを得たさうはそれにも増して大きかつた。

三月十。奥多摩縦走。あの苦勞、あの聖験、あのファイトをとつてお水は何事と恐れることほない。

私は今前途に対し明るい希望を持つてゐる。あの童顔の一年生がゆんじと押しなけて皆と山へ行き、手をとりお水はひまされ、皆一生果命基礎を身につけてお水とした。そうしてどうやら一人前に存りとう部の中堅になつてゐる。今では自活意識と皆の心の中に出来て来た。O.Bとすこしはいい合つた。しかし私が好きなのは誰とて同じであり、討論するの熱心だからこそするのではなからうか。

二年生が部を皆が支え盛りだたして受ける。

西高山岳部にと春が来ました。ほら聞いたらどうなんぞい。

はっせりした。生命のいふきが聞えるではありませんか。

# 七ツ石山

〔曜日〕一月六日〜八日

〔バーテン〕CL加藤山丸平沢山丸管田山林山福田山飯塚山川村山佐藤山川山

〔エクスライム〕氷川(九四〇)〜尾島建設事務所(三、五五〇)〜二、〇三〇

初二日 寺谷。七一川野。五ノ下。尾島。九五〇。一、〇〇〇。山山口(二、〇〇五)

一、〇二〇。一、炭俵(二、四四五)〜一、二一〇。一、鹿舎(二、一五)〜一、二四〇。一、最後  
の穴(四、〇)〜一、堂所(四、三〇)

初三日 堂所(五、五)〜七ツ石山頂(二、〇五)〜一、〇四〇。一、堂所(二、五五)〜鹿舎  
一、二五〇。一、鴨沢(四、五)〜川野(五、一)の。一、五三〇。一、又氷川(六、二〇)

準備 テント四ヶ用二、ワカン二、ラジヲス一、バーナー一、ナタ二、シ  
ベル一、メタボ干、アイかん各一、スキー一、ブーツ各一、その他

この山行が計画されたのは、一月二日(運送不十分)であり、氷が融け日か  
らの降雪で登山が非常に遅れまわつた。とにかく四時頃集合場所の林道も  
氷川にまつたとき、には雪はやんぱりした。バスはもう止つていたが、明  
かすかも知れないと思つて、車庫道(湖)に行つた。必要な道具を準備し、その  
ワイフに聞くと見込なしとの答。一方氷川山荘へ向かう状態を聞いて、山行に  
行つた。目の前の山々の雪が月夜にきらきらと、餘り響いた。バスの外も見込  
がないので、絶道を歩く。氷降りば凍つていて、一歩一歩慎重を要する。トシネ  
ルに入ると、ホツとする。冬の夜だともうの汗かきに、スキーもケレ使  
た。湯沸かしたり、表示と平沢の足が、氷花に粘る。遂に予定を変更して、管内  
の寺の山内に泊つた。風呂入つて寒いのを、新入はほとんど眠れない。ラジヲ  
スも故障するので、ぬいぐるみと、お茶を飲んだ。足は、傷の治らない早根と  
残して、お茶。腹が満ちないの、で、昼食のパンを少し食べた。路にはほとんど雪  
がない。鴨沢を及及び、炭俵、二ノ下、青柳街道から別れると、路には雪

が少し積つて、いるので、スキーを使つた。木よりなとは、炭俵を置いて、  
ゴムの敷で、入りツツカして、歩きにくい。最後から三軒目迄の家で、俵を五六  
枚買入れる。新人が多いので、ピツク上らず、お茶の、色づいて、七ツ石には、明  
いづらに、つきそうもない。止むを得ず、堂所泊りとする。昼食の時、は、スキーで  
すべつて、よる、こんど、いたが、堂所へ、着いた時、は、水が、たりつめた、さ  
る、て、いる。とにかく、火が、欲しいので、鍋、と、林、の、小屋へ、火を、起し、に、行、他、の  
ものは、テント、設置、に、あ、た、つ、た。火が、起つ、た、こ、ろ、設置、を、終、つ、て、小屋へ、来た。結  
局、二、の、状態、を、ぼや、ぼや、する、の、は、む、ず、か、い、い、の、で、小屋、を、泊、り、し、八、時、から、十二  
時、迄、加、味、、笹、田、林、福、田、の、四、人、が、テ、ン、ト、に、寝、ま、こ、と、に、な、つ、た。

暖い火に、生、気、を、取、り、し、美、味、い、い、夕、食、を、た、べ、一、休、み、の、た、後、テ、ン、ト、へ、お、か、け  
た。雪の上、に、積、り、た、炭、俵、。カ、ラ、ン、ド、シ、ョ、ウ、ト、を、重、ね、て、あ、る。カ、ラ、ン、ド、シ、ョ、ウ、ト、が  
急、分、ヒ、ヤ、ツ、と、す、る、か、き、く、け、な、い。春、と、内、の、の、氣、を、を、ほ、ん、と、な、つ、て、寝、ま、こ、と、に、な、つ、た。  
そして、十一、時、頃、寝、た。少、し、寒、さ、を、感、じ、た、か、ら、ん、だ、程、で、は、な、か、つ、た。小屋へ  
入り、火の、番、を、替、へ、て、寝、た。寒、さ、の、た、め、四、時、頃、急、ぎ、で、焚、火、を、回、ら、し、朝  
食、に、は、お、茶、を、飲、み、一、杯、を、飲、み、た。お、茶、を、飲、み、た、ワ、カ、ン、の、お、茶、を、持、つ、て、七、ツ、石、へ。林  
は、是、の、調、子、が、良、く、な、い、の、で、残、る。腹、は、張、つ、た、し、荷、物、は、な、い、し、快、調、に、進、む。雪  
は、相、変、り、す、る、の、で、ラ、ジ、ヲ、セル、調、子、も、な、く、良、上、へ、な、つ、た。尾、根、へ、お、ま、り、と  
も、お、ま、り、と、の、で、ラ、ジ、ヲ、セル、調、子、も、な、く、良、上、へ、な、つ、た。尾、根、へ、お、ま、り、と  
方、に、下、山。下、り、は、足、の、り、も、軽、く、下、り、る。スキーは、ち、ろ、ろ、ん、快、調、無、事、堂、所、へ  
つ、いた。

(註)七ツ石小屋は、積、雪、中、新、人、は、入、る、見、込、  
直、前、に、テ、ン、ト、を、撤、収、し、ホ、ケ、ツ、ト、に、積、雪、の、靴、パ、ン、を、入、れ、て、お、茶、を、飲、み、た。皆、等、に、は、炭、俵  
が、大、き、さ、う、に、お、ま、り、と、あ、る。スキーは、快、調、な、り、の、番、も、アイ、かん、を、つ、け、て、い、る、の  
で、ス、リ、ッ、ク、ア、ン、配、ば、な、く、快、調。お、茶、日、に、比、し、て、炭、俵、揚、々、部、落、に、入、つ、て、か、ら、雪  
も、お、ま、り、と、な、り、アイ、かん、を、取、り、し、か、し、日、陰、に、は、カ、ズ、の、雪、が、積、つ、て、い、る、の、で

スリッパにて非常につらい。しかし雪がない所では非常に快調。登山口で一  
休みの後亦日の事を思ひ出さなから香梅街道を川野へ。そこでバスを米川へ

(林武志)

### 反省

今度の山行はその計画がほとんど二週間前までに提出され、発表会一週間前まであり、当時冬休みであったために連絡がとれず計画の検討・準備が充分に行われなかったために実際の行動に支障を生じた事であった。当日東京ではかなりの雪が降ったため参加者の足が鈍り到着時間を遅くさせたことと最後の行動に大きな影響を与えたこととは確かである。

山平沢の急降が悪化したため途中より同一行動を断念しなければならなかったこととほぼ皆に精神的打撃を与えた事であった。これ等の條件に加えて体力がなかつたことなどの條件のために雪崩を断念せざるを得ない様な状態になったのは残念であった。計画に含まれない要素が入り込んで来たとすくは目的が達せられなくてもしょうがないのではないかな？

しかし登山機に対して経験・知識を得られたことはそれにも増して大きな収穫だったと思う。  
今後に残された問題としてやはり次の次にまた多岐状態に対する判断などの問題があるのではないだろうか。

(C.L 加藤 鈴夫)

### ヒツ石山に登りて

一月六日。確かあの日は雪であった。行くか行かぬかを一悶着の後、結局行く事に決めたのは良かったが、準備が大変であった。これは最悪の場合の事を考えてなかったために、大部分が用意して未だ残ったことが原因であった。これのために遂に目的地に行けなかったのは残念であった。

氷川についたのが十九時。幸い雪がやんでいたので、もちろんバスはない、

仕方なく歩ける前進歩という事になった。月も出ていない夜道で靴がどつろの足を跳めて歩いた。歩ムにつれて水がたぐぐと靴に入ってきて、形勢がたいものになった。そこでややくず時頃には着いてから靴をぬぐのに一苦労であった。さて寝る筈になると山頂の上でもあり、毛布を足すか、火はたけず寒くて眠れなかつた。英時は登山とはこんなにつらいものかとも思ったりした。しかし翌日の好天に気を配りなすべしと、たぐぐと歩いて勇んでとまどはゆひなかつたが、たぐぐと歩いた。登り始めからが大変、自分降り熱くなり着ているものもふやけだる。せめて一歩一歩踏みながら、踏みかきしめて歩いた。この時道この一歩が力強く感ぜられたことには確かであった。

高くなるにつれて空気が冷える場所ではデントの準備をした時は足が凍りそうだった。雪道の小さな雪を踏んで火に当って降りた下すたが靴の間に溜り気がたつた。道標の数字が段々少なくなつて行くのが気がいらなかった。頂上までい、誰かが叫んだ。この音を聞くや否や皆足元も忘れて走り出た。頂上のすくそばに山の名の通り大きな石がセツ有った。頂上に立つてすく目についたのは頂上から雲取に通ずる一定下、て又昇る道だった。その道には靴の跡と息の煙あととが二まぶさ縋りていた。又自分を正すべくに立ちはだかっていた。そのまぶさ、降りた山が自分を招いてい、自分気がたつた。自分も近いうちに、とあの自分を招いてくれた雪原山に登ろうと誓いながら山を下りた。



川口和雄



# 逆川谷 溯行 (個人)

〔期 日〕 廿七年一月廿五日(金) 日没時一七五九

〔天 候〕 午前中快晴一五のより風雪

〔ムムバ〕 田中実、平沢新、地

〔装 備〕 ビツケル、アイゼン(各3)、ガイル(三十米)ゆらじ、ハンマー

カラビナ二、ハーケン(ロック)五、その他

コースタイム 川谷谷入口(0)ー(1)逆川谷出合(0四五一)ー(二)書倉

(ニ)000ー(三)三三三(大谷ワ沢出合)(ニ五九)ー(大谷ワ橋)(四二五)ー(二)段

(四五五)ー(大滝上)(五五五)ー(五二五)ー(舟井戸)(五五〇)ー(大)000(出合)

七〇〇(一七七一五)橋(七三三〇)

○逆川谷出合... 出合を少し過した処での岩壁道を下る。本谷へ降りたら対岸へつり綱を捲りて倒木づたいに岩壁に取つく。逆川へ降りる時は充水不足を見きりぬかぬからさなほど下つてしまつてから進退極まる事があるから注意はねばならない。

○下(十二)米 左岸は兎野な蒼木となつていて頂登は非常な技術も要する。右壁はとりつき中上段バンドをカツティングしてトラバースする。

○下(八)米 岩の風面によつて全貌不明。右岸を捲く。

○下(五)米 岩の風面によつて全貌不明。右岸を捲く。

○下(三)米 遠望。二の上で左岸よりボウヤスス。

○下(九)米 三段より成る。下二段は平尺。蒼木のヌエ、フカットにより

中段へ至る。上段はナメ極状となり水線近く右岸出合(うだがハーケン二本

必要。冬なのでえんりとした。捲くには左岸まるとる少々腕力が必要とする。

二の上小滝多数あり。右よりデスリ。

○下(十三)米 渡次郎沢下りに似ている。左岸が可能だが岩口近く垂直此所がめんどうである。ビツケルがじやまやめ右岸を越す。このすく上に橋(大谷ワ橋)がある。

○下(〇)米 右を突破。左右面又ともすい。

○下(二)米 舟井戸と云うべき五米、三米の小滝を前に全壁があつく

給水。踏み板いた木下に蒼い岩。滝の手前に左岸にルンバが一歩

入つている蒼木がはりの地面白そうな壁を描つてゐる。尾根へ出

てから大変らしい。大滝を捲くには三米の滝の手前より右岸に降り

てアンサウンドな岩ま約五十米。相当リアルハイトを發見される

○滝場より脱するヒトタンに腰までのラツセルとなる。沢身にとつ

て進めは舟井戸の最低部が右に出、一〇米程の近々まで次が止つ

く。水割つて 氷塊は大部分雪が溶

化したものらしく塊状軟質であった。

アイゼンは病的に利く。氷加水あか

の上に付いてゐるため岩からの脱落

を危する事。深雪にはワカンが母

心。以上平沢 慶

〔序 記〕 川谷谷本支流に数回入つたが、いづれもすまぬ(い)ゴルジ

の連続である。殊に柱、火打石のせれを考へると溯行に不利ぬ田中

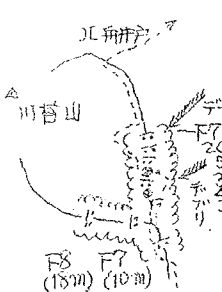
冬山の初めでの平沢とのパー、テは非常に心配したが、意外に明る

谷でゴルジが全くなかつた事、大いに樂であつたが、故をなほ

もう一歩の体力である。無氷期は下(五、下(七、下(八)の頂登(二)のほ

けは初心者でも解める沢である。川谷特有のゴルジと益はない。

冬期(一ヶ月)にひかへてこの山行故身の大幸まつた山行であつた。



# 個人山行 御前山

期日 十二月二十八日

バーテイ 稲田

コース 御岳駅—御前山—大岳山—御前山—新巻—永川

生取ではじめての登山行、少々心配しながらも青楓湖に乘ると川苔山へ行くと言う丘川高校の部長と一緒に、御岳駅から御前山までは、ひつとりと静かであった参道をいざぎ、御岳神社の左側を捲いて尾根道に出る。七代の薙でもみようと思うが、晴風に予備がないこと、単独行であることが、気にかゝつたため、じかに大岳へとりついた。大岳山の登りは、少しへびつたが、馬力をかけて一気にのぼる。山頂につくと自然と腹がすいて来て、急いで飯盒のふたをあける。太陽も丁度南中している株だ。一人でたべるせい、あまじつまくない。大岳から大々ワまひの平和な道を急ぐといつのみまにか、藪なつかしい大々ワへ出る。此所を一休みする。単独行し又悪くないと思ひながら、モヤラメルをシャツからとりだし火をつける。藪口山の前期の鞍部につく。右側におき置がある。とかイドヌツク書かれてある如く、巻みちがあつたのひびくまきまはじめて、やつとわごとで尾根道に入る。この巻を行くと、だんだんスツシユがひびくようになって、先ほど見るほど下にぐつと下つていけるだけ。これいかにと左手を握ると御前山がある。尾根一本向直つてしまつたと感ずき藪口山の防火線き登りなほす。もう一巻巻道を語べてみる。と、やはり巻道は防火線のある小谷尾根道まで、御前山の縦走路の尾根まではつけていない。御前山みはらしのきかないつまらぬ山と聞いていたが折にその通りなので、いよいよその頂を辞し鞍部へもどる。此所から新巻までの道はガツチリ凍りついてよくすべる、持つて来たア

イゼンをつけて快適に下る。途中一本折つてしまひ今見る株は三本風になつてしまつた。  
 福田玄二郎

雪が余風まがってしまった事がある。

## 個人山行 五色スキー

期日 一月六日—七日

P 一D 阿谷 他一名

雪量が少ない今年に列車に乗込むスキー客も少ない。途中隣りに座るおじいさんにおもしろい昔話を聞きながら板屋でも通運する。みぞれの降る中を板屋駅におり立つ。

土地の人のうわさによると、今連で南宮海峡をうめたから海流の關係で東北は雪が少なくなった、と言うことで大雪警んでいる。錢々スキー客には大変わいわいした話である。鐵路がたいに二、三十分違ふと左に五色への道標を見出す。五色橋を渡ると急な坂道になる。雪も一米近くありスキーをつけて登ることも出来ない。駅より一時前半のアルバイトで着て二のスキー場はまったくちがうだけな所である。校舎の棟は今夜の宿五色温泉はスキー場の上に連なつてゐる。このスキー場は百貨店の屋上のラスキー場と変わる所もなく全くつまらぬ所である。

七ツ石山の峠のこと、冬山が初めてと云う川、さびた八本此アイゼンを使つたときと、さびたときをかけたまでは良かったが、さあ寒さと云う難段になつては、そのドキ／＼する様子をまたまらんてしまひ、痛む足をなマン纏する事しきりであつたが、遂に尻弁へ指つただけで帰家した。日くハチ何のためにやりとをなしたる。





# 公式山行第四六回 多摩川南陵縦走

## 一 概要・目的

西高山岳部がこの二三年間基礎確立以奉専ら級数的に発展して来る事は数  
 目の一致するところである。又部の主眼がパーティシップと生活技術に向けら  
 れていると云う事も今を放す因となつた事大である。云わねばならぬ  
 しかるに部の主力たる三年の卒業を見れば貧弱が二年にかわつて豊盛時益  
 一年部員が一九五二年度の主力にあらねばならぬ。単に自己の山行のみが  
 ならず次代の一年をたきいて行かねばならぬ立場にあるわけである。

一般に中学には登山と云ふスポーツ団体はあり。新人はまじりて全くの白紙で  
 ある。それが今年のみに限らず六三三制が廃止されぬかぎり、入部以來わずか  
 一ヶ月の二年部員が部の中絶せる山行を行ひ指揮して行かねばならぬ。その  
 様な條件の中に一年部員の夏山縦走参加はわずか二名と云う結果が付随して  
 いる。これによつて次代主力となる一二年の甲子年といやうな存在してい  
 るのである。勿論最後は白紙に等しい。新人を迎へる四日迄に此節を何と  
 せねばならぬ。こゝまで出したのが八月十一月の末であつたと思ふ。

専らメンバースキップ・リーダーシップの強化の要ある事。(1)夏季生活技術と  
 得する事にある。これには合宿以外にはかりが、三十名に迫り然るに準備に備  
 へべき整備がなかり。スキーにはコースと金がなかり。最後に残つたのが夏  
 期の縦走でこれより外に持物はなかりなかつたのである。

## 二 計画ならびにその経過

初頭し合(CLC)によつて三月末の興芳彦縦走案が組み立て

三頭山——西高山——海員嶺の——三頭山——日見山——大岳山——戸  
 岳 二山は山をきく見事な縦走にして登攀度を失つたため此行は長期の準備

備トレーニングを必要とするメンバーアップの強化の意味で全く未知のヤブ庭  
 根を有するヤブ庭を作る事にした。又陵線の関係から全部天幕(東京テント  
 より借用)を使用するものとした。

三頭山——丸川峠——クニウチゴテニタル(1)——嶺——大菩薩峠——石丸峠  
 ——牛ノ根——大がら(2)——奈良倉山——ツル峠——三頭山(3)——大岳山——  
 一日の出山(4)——香梅 最終日は一般生徒の参加によるハイキングとした  
 が右に大がら峠にて合前大岳山とクニウチゴテニタルと唐松と改正された。  
 十二月中旬に田中將利がCLCに決定され直ちに隊員數十名としての研究会に  
 入り実行に入った。

資料不足のため今年の縦走の分水嶺は備前並に予備調査約百二十貫中約廿貫を  
 CLC(2)予定地裏にあがき事があり三隊を出して施行した。  
 一月下旬に研究会の研究合及準備会が急行停止縦走隊員の確定により十六人  
 今の金計算が定於一應三年は千を引き二三年に計画通りにする準備を行はし  
 めた。

- 総指揮 加藤(八月より) 岩田(9月)
- 監督 加藤(八月より) 岩田(9月)
- 副監督 福田(9月) 香梅(9月) 関谷(9月) 川村(9月) 多田(9月)
- 金務 林(9月) 佐藤(9月) 下出(9月)
- 燃料係 松崎(9月)
- 食料係 飯塚(9月)

トレーニングは二三年担当の左執行はれなかつた。三坪のこの間タツキせず  
 三月七日卒業の日になつて準備が全無出来てはかりのを知つた。その上十  
 三日の準備会に至り大量の不足が着が、出来参加者の半数が三年(新OB)となつ

てしまった。これにより生ずる種々の條件からCが起つて一時計画 （参考） を言いたが熱心な方もあるため最新人の考加を認め、P、T、E、D、G、H、I、J、K、L、M、N、O、P、Q、R、S、T、U、V、W、X、Y、Z、AA、AB、AC、AD、AE、AF、AG、AH、AI、AJ、AK、AL、AM、AN、AO、AP、AQ、AR、AS、AT、AU、AV、AW、AX、AY、AZ、BA、BB、BC、BD、BE、BF、BG、BH、BI、BJ、BK、BL、BM、BN、BO、BP、BQ、BR、BS、BT、BU、BV、BW、BX、BY、BZ、CA、CB、CC、CD、CE、CF、CG、CH、CI、CJ、CK、CL、CM、CN、CO、CP、CQ、CR、CS、CT、CU、CV、CW、CX、CY、CZ、DA、DB、DC、DD、DE、DF、DG、DH、DI、DJ、DK、DL、DM、DN、DO、DP、DQ、DR、DS、DT、DU、DV、DW、DX、DY、DZ、EA、EB、EC、ED、EE、EF、EG、EH、EI、EJ、EK、EL、EM、EN、EO、EP、EQ、ER、ES、ET、EU、EV、EW、EX、EY、EZ、FA、FB、FC、FD、FE、FF、FG、FH、FI、FJ、FK、FL、FM、FN、FO、FP、FQ、FR、FS、FT、FU、FV、FW、FX、FY、FZ、GA、GB、GC、GD、GE、GF、GG、GH、GI、GJ、GK、GL、GM、GN、GO、GP、GQ、GR、GS、GT、GU、GV、GW、GX、GY、GZ、HA、HB、HC、HD、HE、HF、HG、HH、HI、HJ、HK、HL、HM、HN、HO、HP、HQ、HR、HS、HT、HU、HV、HW、HX、HY、HZ、IA、IB、IC、ID、IE、IF、IG、IH、II、IJ、IK、IL、IM、IN、IO、IP、IQ、IR、IS、IT、IU、IV、IW、IX、IY、IZ、JA、JB、JC、JD、JE、JF、JG、JH、JI、JJ、JK、JL、JM、JN、JO、JP、JQ、JR、JS、JT、JU、JV、JW、JX、JY、JZ、KA、KB、KC、KD、KE、KF、KG、KH、KI、KJ、KK、KL、KM、KN、KO、KP、KQ、KR、KS、KT、KU、KV、KW、KX、KY、KZ、LA、LB、LC、LD、LE、LF、LG、LH、LI、LJ、LK、LL、LM、LN、LO、LP、LQ、LR、LS、LT、LU、LV、LW、LX、LY、LZ、MA、MB、MC、MD、ME、MF、MG、MH、MI、MJ、MK、ML、MM、MN、MO、MP、MQ、MR、MS、MT、MU、MV、MW、MX、MY、MZ、NA、NB、NC、ND、NE、NF、NG、NH、NI、NJ、NK、NL、NM、NO、NP、NQ、NR、NS、NT、NU、NV、NW、NX、NY、NZ、OA、OB、OC、OD、OE、OF、OG、OH、OI、OJ、OK、OL、OM、ON、OO、OP、OQ、OR、OS、OT、OU、OV、OW、OX、OY、OZ、PA、PB、PC、PD、PE、PF、PG、PH、PI、PJ、PK、PL、PM、PN、PO、PP、PQ、PR、PS、PT、PU、PV、PW、PX、PY、PZ、QA、QB、QC、QD、QE、QF、QG、QH、QI、QJ、QK、QL、QM、QN、QO、QP、QQ、QR、QS、QT、QU、QV、QW、QX、QY、QZ、RA、RB、RC、RD、RE、RF、RG、RH、RI、RJ、RK、RL、RM、RN、RO、RP、RQ、RR、RS、RT、RU、RV、RW、RX、RY、RZ、SA、SB、SC、SD、SE、SF、SG、SH、SI、SJ、SK、SL、SM、SN、SO、SP、SQ、SR、SS、ST、SU、SV、SW、SX、SY、SZ、TA、TB、TC、TD、TE、TF、TG、TH、TI、TJ、TK、TL、TM、TN、TO、TP、TQ、TR、TS、TT、TU、TV、TW、TX、TY、TZ、UA、UB、UC、UD、UE、UF、UG、UH、UI、UJ、UK、UL、UM、UN、UO、UP、UQ、UR、US、UT、UU、UV、UW、UX、UY、UZ、VA、VB、VC、VD、VE、VF、VG、VH、VI、VJ、VK、VL、VM、VN、VO、VP、VQ、VR、VS、VT、VU、VV、VW、VX、VY、VZ、WA、WB、WC、WD、WE、WF、WG、WH、WI、WJ、WK、WL、WM、WN、WO、WP、WQ、WR、WS、WT、WU、WV、WW、WX、WY、WZ、XA、XB、XC、XD、XE、XF、XG、XH、XI、XJ、XK、XL、XM、XN、XO、XP、XQ、XR、XS、XT、XU、XV、XW、XX、XY、XZ、YA、YB、YC、YD、YE、YF、YG、YH、YI、YJ、YK、YL、YM、YN、YO、YP、YQ、YR、YS、YT、YU、YV、YW、YX、YY、YZ、ZA、ZB、ZC、ZD、ZE、ZF、ZG、ZH、ZI、ZJ、ZK、ZL、ZM、ZN、ZO、ZP、ZQ、ZR、ZS、ZT、ZU、ZV、ZW、ZX、ZY、ZZ、AA、AB、AC、AD、AE、AF、AG、AH、AI、AJ、AK、AL、AM、AN、AO、AP、AQ、AR、AS、AT、AU、AV、AW、AX、AY、AZ、BA、BB、BC、BD、BE、BF、BG、BH、BI、BJ、BK、BL、BM、BN、BO、BP、BQ、BR、BS、BT、BU、BV、BW、BX、BY、BZ、CA、CB、CC、CD、CE、CF、CG、CH、CI、CJ、CK、CL、CM、CN、CO、CP、CQ、CR、CS、CT、CU、CV、CW、CX、CY、CZ、DA、DB、DC、DD、DE、DF、DG、DH、DI、DJ、DK、DL、DM、DN、DO、DP、DQ、DR、DS、DT、DU、DV、DW、DX、DY、DZ、EA、EB、EC、ED、EE、EF、EG、EH、EI、EJ、EK、EL、EM、EN、EO、EP、EQ、ER、ES、ET、EU、EV、EW、EX、EY、EZ、FA、FB、FC、FD、FE、FF、FG、FH、FI、FJ、FK、FL、FM、FN、FO、FP、FQ、FR、FS、FT、FU、FV、FW、FX、FY、FZ、GA、GB、GC、GD、GE、GF、GG、GH、GI、GJ、GK、GL、GM、GN、GO、GP、GQ、GR、GS、GT、GU、GV、GW、GX、GY、GZ、HA、HB、HC、HD、HE、HF、HG、HH、HI、HJ、HK、HL、HM、HN、HO、HP、HQ、HR、HS、HT、HU、HV、HW、HX、HY、HZ、IA、IB、IC、ID、IE、IF、IG、IH、II、IJ、IK、IL、IM、IN、IO、IP、IQ、IR、IS、IT、IU、IV、IW、IX、IY、IZ、JA、JB、JC、JD、JE、JF、JG、JH、JI、JJ、JK、JL、JM、JN、JO、JP、JQ、JR、JS、JT、JU、JV、JW、JX、JY、JZ、KA、KB、KC、KD、KE、KF、KG、KH、KI、KJ、KK、KL、KM、KN、KO、KP、KQ、KR、KS、KT、KU、KV、KW、KX、KY、KZ、LA、LB、LC、LD、LE、LF、LG、LH、LI、LJ、LK、LL、LM、LN、LO、LP、LQ、LR、LS、LT、LU、LV、LW、LX、LY、LZ、MA、MB、MC、MD、ME、MF、MG、MH、MI、MJ、MK、ML、MM、MN、MO、MP、MQ、MR、MS、MT、MU、MV、MW、MX、MY、MZ、NA、NB、NC、ND、NE、NF、NG、NH、NI、NJ、NK、NL、NM、NO、NP、NQ、NR、NS、NT、NU、NV、NW、NX、NY、NZ、OA、OB、OC、OD、OE、OF、OG、OH、OI、OJ、OK、OL、OM、ON、OO、OP、OQ、OR、OS、OT、OU、OV、OW、OX、OY、OZ、PA、PB、PC、PD、PE、PF、PG、PH、PI、PJ、PK、PL、PM、PN、PO、PP、PQ、PR、PS、PT、PU、PV、PW、PX、PY、PZ、QA、QB、QC、QD、QE、QF、QG、QH、QI、QJ、QK、QL、QM、QN、QO、QP、QQ、QR、QS、QT、QU、QV、QW、QX、QY、QZ、RA、RB、RC、RD、RE、RF、RG、RH、RI、RJ、RK、RL、RM、RN、RO、RP、RQ、RR、RS、RT、RU、RV、RW、RX、RY、RZ、SA、SB、SC、SD、SE、SF、SG、SH、SI、SJ、SK、SL、SM、SN、SO、SP、SQ、SR、SS、ST、SU、SV、SW、SX、SY、SZ、TA、TB、TC、TD、TE、TF、TG、TH、TI、TJ、TK、TL、TM、TN、TO、TP、TQ、TR、TS、TT、TU、TV、TW、TX、TY、TZ、UA、UB、UC、UD、UE、UF、UG、UH、UI、UJ、UK、UL、UM、UN、UO、UP、UQ、UR、US、UT、UU、UV、UW、UX、UY、UZ、VA、VB、VC、VD、VE、VF、VG、VH、VI、VJ、VK、VL、VM、VN、VO、VP、VQ、VR、VS、VT、VU、VV、VW、VX、VY、VZ、WA、WB、WC、WD、WE、WF、WG、WH、WI、WJ、WK、WL、WM、WN、WO、WP、WQ、WR、WS、WT、WU、WV、WW、WX、WY、WZ、XA、XB、XC、XD、XE、XF、XG、XH、XI、XJ、XK、XL、XM、XN、XO、XP、XQ、XR、XS、XT、XU、XV、XW、XX、XY、XZ、YA、YB、YC、YD、YE、YF、YG、YH、YI、YJ、YK、YL、YM、YN、YO、YP、YQ、YR、YS、YT、YU、YV、YW、YX、YY、YZ、ZA、ZB、ZC、ZD、ZE、ZF、ZG、ZH、ZI、ZJ、ZK、ZL、ZM、ZN、ZO、ZP、ZQ、ZR、ZS、ZT、ZU、ZV、ZW、ZX、ZY、ZZ

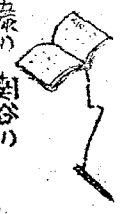
この山の研究会にも出席者は不考者を含めてもC以下二三名と云ふ感はあつた。  
 出発日の廿日、チンヤク、虎の谷の縦走隊が出来上つたが、十九日に計画の出発した縦走隊に對しては休養をとるまゝに全くなかつたのである。又同時に林ヶケが、脱落する筈とやがた、これのまゝCの倉庫に頭を埋めつつ薪屋を築いたのである。Cの食料も無事だが、左は奇跡と云ふべきにや。

### 三、実行

(1) A隊縦走隊（C隊大谷の線）との連絡は廿四日午時の時合同する予定とし、若し午前一時までにA隊大谷の線はA隊より樹立し独自の行動をとるものとし、連絡は翌日雨天の場合にA隊は独自の山行を行つたものとした。B隊縦走隊（この連絡は緊急の場合のみとしたが、数日前には連絡を断つて、A隊の三島田軍に出発するもの）と取つただけで、具体的な対策は合せておいておいた。  
 (2) A隊の行動計画は種々の資料より大體向を定めておいたものとして、A隊の行動は限られた。休養期間も雨天の場合とし、それ以外の時は（時間）どおつても行動するものとした。  
 (3) C隊の食料に（絶食食料）と（避難のあった場合には隊員の半食）とを準備し、焼酎もその他の準備もして小管入下し、材料を雨幕の上野倉食料を

購メソル峠にて合同させるものとした。(1)此峠にて(2)  
 (4) 結露を先に云ふは、本山行全隊は部員の大数以上の考加を要したにもかからず、大部の線をおぼつたの山行ではない。最も無知能の山行に終つたのである。結果は出発前にすでに現れていたのである。(C) 田中將利

### 偵察・荷上行動



才一隊 岩塊の 鈴木 (3) 春藤の 奥谷の  
 目的……(1) 勝線庄との連絡 (2) 牛の根線線の偵察並に標旗を懸置  
 才二隊 笹田 (3) 加藤 (2) 松山 (2)  
 目的……(1) 小管村との連絡 (2) 全重量百三十貫中給せ置、荷上げ  
 才三隊 田中將利 (1) 平澤 (2) (3)  
 目的……永川との連絡 (才一才二隊との)  
 才一隊 才二隊は今水陵大谷にて廿四日午前十時合同し、後才二隊との下に文三、才一東面のルートを含む復路するものとす。  
 才三隊は才一才二隊水川橋着后合同、出陣にて総合検討を行ふものとす。  
 才三隊 乾飯 (三才)、カンパン (百貫)、ミルク (二ポンド)、炭 (二俵)、ガソリン (二ガロン)、炭灰 (金)、その他 計廿貫

偵察行動報告

十二月二十四日

才一隊報告 (以首学年は金三一九三年度のものとする)

し 岩嶺(三三) 鈴木輝夫(三三) 内村 徹(二) 斎藤忠正(二)

在△...前述の通り。

十二月廿三日と廿四日

裝備... コツフェル、鉈、鋸、アイゼン、ハビ、ラジウス、

バーナー、テント四人用、ガソリン、ガロン、出立手

アイ△ 嵐山(三三) 五〇四一五〇―小田原橋の六〇〇六二〇―神倉

〇七二〇〇八三〇―上田川峠(一) 五〇一三五―勝藤(二) 一五

〇一三二〇―大菩薩峠(四) 〇七〇一四三〇―天狗淵(一) 五〇八二一五

一〇一〇(一) 五二五 食事 一七三五

才二日 出立の五五五石丸峠の八〇〇―牛を根への分岐の八二〇―

カッロへの分岐の八五六―〇九〇―カカリバの〇五五―〇三五―小菅

村への分岐の〇四〇(甲倉) 以下小菅村 班と合同、

シトくと降りぬ大雨に合せてさつ青梅街道を進む、打続く懸

崖不足のため一行の前途は多分不安だ。吾等附近で塩山駅へ向うバスに

乗る。宿相帯に泊めておける村に、雪降車についで朝食とする。塩山からの

バスが着て着くまで、ついで、ようやく雨も上つた。おのれを急ぎ、途中

雪が積りたつた。判りなかなうと思われ、地味に急をまつてつて進む。

伊豆峠はかじらない。上田川峠も近くなつた。が予期に反りて雪は急な

い。勝藤社で中食とする。二ツリめしにかりリンが、オチて非常にす

い。勝藤社の人に討取の概要を話し協力を求める。炭は附近の炭焼小やで

買えばよいと云ふことに存り急務する。この頃より尾の陣が響く。峠で一体

の後天狗岩棚山に向う。こゝは道がせまく木の根がはり平の樹木もあり非

に歩きにくく又道の判別もしがたい。雪降車の困難を考へてみんばんに衣

布をかける。石丸峠を下に見る急な急を怖とする。且、足踏くつくり今夜の寒心

地が心配だ。只、かじりないので炭を急ぐのをあきらめ急のパンを急せし

べる。木もなかり。非難に寒いから炭を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ

急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ

急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ

急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ

急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ

急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ

急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ

急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ

急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ

急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ

急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ

急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ

急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ

急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ急を急ぐ

三井採記

◆第三隊報告

十二月二十三日―二十四日

し 菅田英次(三) 加藤幹夫(三) 船崎公平(三)

在公目的並ボツ刀島目は前記

タイム 立川の七二〇落―永川の八四〇〇〇の八五〇〇―坂川の九三〇〇〇

〇〇―小菅村後場(二)ニニミク(一)四四三―東山小屋(六三〇〇) 泊

前日大あめであつて、植付した十六人分の食料、ホシイロ升、カンパン四

貫、白油カン四アをサツクに入れていた。川野もあやけのタバコを賣り出せ

する。小菅村の後場に於て初夜をやりすと、三日中旬の積雪の状態は暴風

雪は食糧運搬の場合に於て對策が困難、その為、つづくの積雪を掛る。可

事は射人の心を煩悩するのみである。衆の職人荷上のため、朝霧大夕ワへ暴風

の地味に度々、柳沢に入り、東山小屋の人の好意により、入夫小屋を借用さ

せてもらう。泊。

タイム 氷焚の八〇〇―大カワ(一)五〇〇―一五二〇―田元(六一〇)―

川池(六四〇)―トス―米川

各自八貫の荷にあつて、柳沢の中間宿をつらぬく。處々雪を三分し大カワ

までニ往復した。荷を多めて運ぶに水場をさがすため、カワの凍結道を凍結中

の一隊が食事をしているのを発見、合図する。キニ隊は六マテイ出(一)〇〇の

隊を凍結にキニ隊はボツ刀島を小屋の内外に五ヶ所を要所としてつめる。西側

が凍り、六マテイ東面側の偵察隊は手をつけずに下る事にした。パスにて

米川へ、キニ隊と米川山荘にて合図。赤巾井約十本使用。

〇 植付は白油カンの中に入れる事によつて完全をばかつた。従来は荷と品を

凍結物と袋に樹上にくくりつけたものであるが、此の厚りは射師が多いため

凍結物を想して土中にくる事にした。このためカンパン、炭火等の凍結

を懸念する心配が甚だ大となつた。后和ガンの山はローを凍結の上、ゴムテ

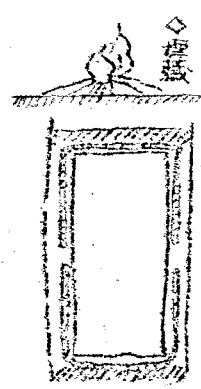
を懸念して、我々隊によつて完全を期した。

〇 小屋は屢屢中破サイド床共に全くなく、使用不可能に成り、大量の降雪には

何とかなりせうである。又氷は土登川のヒロヨシ沢及びカワパス、ペリッパの源

頭のみしか凍結した。往復二十分を要す。又積雪には不可能と感はれる。

◇ 植付



上下共凍結、四枚、更だどの上を周囲に

凍結を及く十センチ四方の二入。土を

かけた上を凍結させ、凍結物の状態を

みへいせんとした。前後は二十セン

今くついであつたと思つた。

◆オニ三隊報告

し 田中清英 又次 三

十二月廿四日

タイム 立川(四四〇)―米川(六〇〇)―東山(六一〇)―大入入口(六一

六二五)―大入和(六二五)―七一〇―一七三〇―一七四〇―米川(八五

〇)

二十三日の夕方に日暮の雪の積雪があげられた事か、つていたので、凍結

積雪の赤巾井約六本を切つた。オニ隊が植付にむかふ。殊に積雪止との凍結

ある。直ちに進軍へ行つたが、凍結が不化のため、縦走中の水場調査のため、

天の入り入る事にする。大天小屋上のエンテイから上は、積雪の有無の場

合でも、凍結が水に下る事はない。雪の厚い所を再調査した。雪の厚い大

カワワ峠で早くも日没、雪が降り、雪が降り、雪が降り、雪が降り、雪が降り、

四回もかけたハイモンゴースだが、積雪が氷の所の植付は、うすくついたり

雪が降り、雪が降り、雪が降り、雪が降り、雪が降り、雪が降り、雪が降り、

雪が降り、雪が降り、雪が降り、雪が降り、雪が降り、雪が降り、雪が降り、









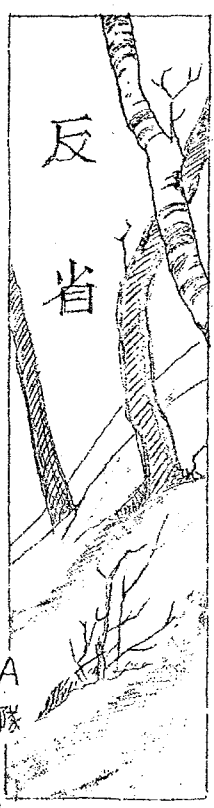




テント火事や村の酔っぱらいの未訪におびやかされた夜もようやく明け六時に予定より二時間おくれて出発。荷馬車の通れる位広いつま先上りの麓を歩み麓峰に着く。味から三頭山への径は千八番峠附近まで長作が炭焼が入っていた。尾根が最初に東へ九十度折れる所で径をさけて隣りに出、フツシユの中を登る。雪は南面にはあまり残りが一歩北面は殆んど氷結している。歩みでもぐり非常に歩きにくい。予定より相当おくれているので救馬隊と連絡すべくピッチをあける。山焼山の一ツ手前のピークでゴツホをあくる。正に入時廿分。隣上を忠実にたじろ。積雪約四尺。やがて三頭西峯の二ツ手前のピークで救馬隊を残して行つた遺骸を発見する。タイムは八時廿分である。救馬隊と約二時間かへだたりがあるのを知つてがっかりする。三頭山で更に一枚の連絡紙を察見した。パテたり腹さこゆしたりしている者が多いため、隊と連絡は不可能と考へ、約二時間の差のあるB隊によつて何らかの連絡がなせるものと判断し、元気の良いもの四名を加藤手直つて只張峰に急派し、御前山登路を歩んでゐるであらうB隊に連絡するために出発させる。後発は荷のせじりの上出発。朝までクラストしてしたのであらうが救馬隊の人々のもぐつていない足跡を自あてい一歩一歩もぐりつゝ進む。重荷の後発の中でも一倍重い下ほど一歩一歩睥まで立ちこける。他人の穴へ落ちればヘソまでもぐる。軽荷の者何れもぐつていない。後発隊が只張峰へついたら先発の陣中はいずれ、只張峰までの陣令を無視している。Cしかかけあしり月夜見山東側どうろくしている先発を尾つけ只張峰へつれもどした。この間約一時間でも先発の陣中は只張峰の位置がわからなかつたのだと云う。軽度の凍傷一、腹痛ニバテレックス数粒をゴバクして御岳まで行く事。目の前に入岳を見ていながら明日の行動にさしつかえのない者が四人以下になるのが明らかになつた。目的を達する事はたしかに大争な事であるが動

けぬ腹は意気の弱し着を無理させてまで強行する様な備はないものである。田中謙 やつとカンパンの昼食をとる。天候もあやしくなり感々山々が只張峰にたゞかかっているのを見て進走をやめて全隊同一行動をとるべき事として派山する事に決定し只張峰から日指の部落を通り小町内村に下りバスで氷川に出る。ほどほどのものがピッチを引いて唇リキスリンスがこわれたと云ふものや折れたストックをが、こしている者など相當の惨状を呈していた。

(音藤)



第一日

批評の対象となる大きな問題により、めいけいわけであるが、私は例によつて、こゝからいれた事から書いて行く。勿論これは私が山に登る限り強調する事と成るであらう。

最後すべり出ま列車を握手でおくつてくれた多敷陣員の心通まる友情が先発前の備蓄備期間にその十介の一でも向けられたいら、縦走隊員に於ける肉体的精神的負擔は解消されたいであらう。今後とも山に於ける共同生活のものゝ表社会に於いて協同即ち調和の形を多ととも養つていたがたい。度々枚原で行つてゐるテント宿泊も結局は融合をはかる一助をすべきなのである。こゝ各自の性格當時の荷荷量を我々の過去の荷荷量と比べてみるに十一人中八人が彼等として最初の負擔があり、しかもその中には初めてかつぐ者が二人も居た。重量としては冬山の最々限であつたが、こゝろに自己の能力

と雖も、精神的弱みを吐く傾向が見られるのは、二テでも、三テでも、次敵を討  
るよりも、一テの不安とあるであろう。その裏で、心配感得させた一日目特に  
裂石達の行程を難なく通過した事は、結局精神的肉体的闘争に打ち勝ったのであ  
る。歩行中手を掛け合う事は、実に心強、元気があつた腹の底から太い若々し  
い声を出して、同志を励ますものである。バテてりて居た手に口先で吐き出す  
様子が、いかに出る。どうも、どうも、我が山岳部が、固い、固い、これは本年  
度の全營が、大く一大又美であると思ふ。山容は、等々、途に逢つた際は、おありつ  
ける様に、「インイワン」を、云う習慣が、欲し。

今日の行動は、小休止を取り過ぎていた。三十分、一回の予定が、二十分以内  
一回の割合で行われていた。ラッセル中は、こまかく、一ミクラ、走出を、迎りまどは、も  
つと、返らすべき行程である。PIによつて、問題として、行動時間と小休止時間の配  
合である。

オ一日は、別に行動に、ついで、又個人に、ついで、批判となる、莫は、見受けられ、様  
であるが、最後に、幕営地に関する、何故に、今日の行動を、ここで、打ち止めたか、と、云う事  
これが、問題となる。結局は、今日の先敵が、縦走を完了する事が、出来ぬ原因とな  
つたのである。私は、以外に、積雪と、云う前に、CLは、この山を、世見、ひき、いる、隊員の、状  
態を、知らなかったのでは、ないか、と思ふ。しかも、私は、CLの、云う、行動時間の、限界が、  
ギ向で、あつた。ま、こめて、云うならば、CLは、變観的、観測に、固定せ、せられ、考へ、考へ、  
範圍で、は、二日目にも、ついで、自分の、観測の、誤りを、知つたのでは、ないか、と思ふ。  
やうであり、と、すれば、この、縦走は、出発前、から、完全、出来、たり、事に、定ま、つて、いた、もの  
と、私は、観測する。少くとも、CLは、天候、から、見ても、隊員の、状態、から、見ても、あ、こ、二  
時間、半は、充分、動かすべき、であつた、らう。この、肉類に、向、以上、は、私の、見、方、と、し  
て、お、きた、い。

幕営・食当・偵察は、午後二時の、太陽に、照ら、されて、記録的、な、速さ、だ、つた。しか

し、食後の、火、たき、後、か、た、げ、つ、と、ふる、と、出る、もの、二、三、年、た、つ、又、も、  
に、それ、を、やら、ず、に、寝、て、しま、つ、た、事は、タイム、マン、と、云、う、より、其、種、の、あり、か  
を、全然、身、につ、けて、いな、い、と、し、か、思、わ、れ、な、い、多、り、一、テ、も、  
(PI、田、中、史)

### 第二日

今日の行動時間が長くなつたのは、主な原因としては、能取山(天狗山)の、  
も、ぐる、ベ、タ、等、と、半、の、峰、の、意外な、積雪量、並びに、雪、庇、にお、び、や、か、され、た、事、によ、つ  
て、時間、を、と、つ、た、事が、原因、して、いる、と、思、う。天、狗、山、は、冬、にな、つ、て、いた、ため、し  
ま、つ、て、居、る、す、荷、物、が、凍、り、の、に、加、えて、脚、ま、で、も、ぐ、り、苦、勞、した。

他の原因としては、出発のおどかつた事(小、時、間、半、の、遅、刻)、小、時、間、半、の、長、か、つ  
た、こと、雪、壁、に、足、を、落、さ、ぬ、様、に、氣、を、使、つ、て、精神的、疲、勞、が、肉、体的、疲、勞、と、相、當、つ  
て、バ、テ、た、故、であ、つ、た。多、り、一、テ、の、隊、員、不、満、一、種、識、布、の、不、足、等、  
行動時間を長くして、迄も、自動地、に行、く、べき、か、?  
(加藤、鈴、夫)

### 第三日

一、第、三、日、の、出、発、時間、のお、ど、かつ、た、事。これは、前、夜、の、到着、が、お、ど、く、し、田  
中、が、明日、は、雪、止、り、大、マ、チ、イ、山、の、東、面、偵、察、と、云、つ、て、ぬ、て、しま、つ、た。為、に、朝  
食、の、食、当、が、六、時、に、た、つ、さ、お、こ、し、て、あ、め、て、支、仕、に、と、り、か、か、つ、た、し、ま  
つ、て、又、昨、年、未、に、埋、めた、乾、パン、は、一、部、しか、昨夜、振、ら、な、かつ、た、ため、残、余、を、補、は、つ、  
た、事、この、二、日、の、食、料、の、お、く、れ、の、原因、である。

二、三日目の行動尾根は、昨、年、偵、察、も、れ、にな、つ、た、所、であ、つ、た、ため、ルート、の、探、索、  
に、時間、を、多、く、費、した。更に、尾、根、の、雪、が、低、い、ため、に、く、さ、つ、て、お、り、腹、の、深、さ、の、ラ  
ッセルに、全員、が、苦、し、んだ。しかし、この、日、の、ト、ツ、ス、ラ、ッセル、は、前、日、の、如、く、交  
代、が、スムーズ、に行、か、ず、一、部、の、者、即、ち、各、パー、テ、イ、の、リー、ダー、が、行、進、つ、て、お、り、各

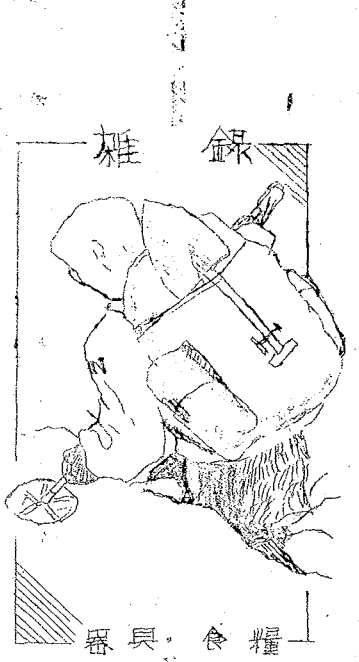
パーティーのしは隊員が燃料を消費して今日のラッセルをする宛迄のまい事を判断した為である。更にこの日自立した事はオ一日、オ二日目に比し各人の持つ荷物の量にかなりの差が出来た事である。つまり多くの荷にあえぐの成各パーティーともして、このしが大部分の行程のトツアシラセラとなつたのである。思い切つてこの日は宿幕し各人の回数を減らす方が長くはなかつたかと思ふのである。

第四日

オ一日の探観、オ二日の苦闘はオ三日に至り停歩多くつがえず高峯となり午時四時従徒路を放棄しなければならぬ状態となつた。オ四日日鷹隊を脱した時ですら未だ鞍馬隊に合流出来て、御岳山まで到達すると云うことしの總体助見解を隊員が信じていたのである。地図を弄ひてくれ、隊員はオ四日目の行程を全この山行から体験して三頭から御岳又は日和田迄歩けると思つていたのである。カ論ぞのファイ上を讀みたい。

凡そ峠を知らぬ先路隊は隊員が、どこまで戻されしかもどこまで縦走を打切つたまじめには絶対受け得べきであつた。即ちどの原因である四日目の縦走を艱苦と闘いしかも今日は鞍馬隊水川隊と連絡をとるとことしは断言した。隊員としては只張隊のハヴァークして続行せんかとして何日かおめだとしか云ふまいかあたりまゝと云つて受けくらしいであらう。又燃料を切らした件は使わないうガソリンをわざとく極つてまで拵かえら水とも上日川峠、大多和、小菅村で炭を求めておくべきであつた。

鷹隊が炭無しで終つた事は直に面する事態を考へず希望を里に向けていたのであらうか。鷹隊から脱落したいと云うものも多し事だし三頭の頂へ後隊を作らねばならぬ状態となつた時、直ちにC4地帯を指命して数隊隊に対しては連絡隊を作る事が最善の處置であつた事と思ふ。又二三年隊員も三日ぐらゐの停滞



○ 糧食隊の上に出に肉して

心配しては食糧カンパン、炭の含炭度の問題は、不可思議な程何の変化も見られず、湿気は殆んどなく決的に使用出来た。方法は前述の通りで他パーティーにもおすすめた。餅については実験用として十一月から用意してあつたのを心なき部員が目の中におさまつてしまつたのは研究心盛んなるものとして知らうんでもあまりある事であつた。尚湿度に使用した炭俄も乾燥してはマツトとして充分な効果を上り得たと思ふが、たゞ一つガソリンが引火しにくく、なつては事、まごが受質とは思はれたい調査の要あり拵ちかえつた(ガロン)

○ 赤布片の偵察隊

長さ一尺余巾二寸及至三寸の赤布片で隊員用として偵察隊が地上二米につけてくれたものであるが(約五十本使用)滑す水サレであつたり埋つていたりして発見しにくく、残置の位置がわからぬため方向判定に苦心した事も一重や二重ではない。又牛の糞の検出だ、広い森林隊ではガスや降雪の場合には視界内に雲を凝結して位置の認められる検出距離と方法をえらうべきである。ラッセルして雪の中から出る場合もあり、五十数本のうち約半数しか発見出来なかつた。

○ 器具



は当り前の覚悟を思つて体力に余裕を持たねばならない。この裏出しが敵員の体力不足による縦走中止(表面の宿思)となつた事はトレーニン不足と共に実に裏に残念な事であつた。

C3に於けるP3のテント火事はランタンの過熱である。そして頭の過熱である。就中中のローソクは殆どの燃焼がなかつた筈である。

尻張り峠の下りは命令もないのに腹が立つ様な徒競走であつた。裏山でも痛裂に言はれた事ではないか。

最後に四ヶ月の計画にもかゝらず此迄直前アイマイな返事で行けない「荷が無い」と言ひ出す態度は最後に益反を期すものである。

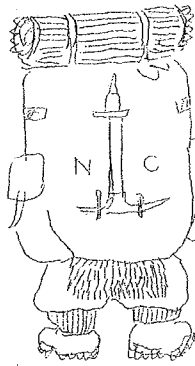
全体についてこの地味及小休止の際の敏捷を欠いた惨憺なる出発態度(殊に出発用意が云はれてからのザソクの整理など)等夏山の反省会に於いて上げられたい所である。

救急隊水川隊の絶大なる協力を謝し又無事で帰着し自己の責任を如何なく終着してくれた縦走隊員の勵志と反響に對して深く感謝する次第である。西高山岳部の発展を期して。

(一九五二年四月十五日 田中興)

評

C. L  
田中 哲利



私 も各リーターの林に結果を主眼と

して考察を述べて行こうと思つたが、決して察からの因の立場の追求にのみならず、いゝなし等(二)志とわつておく。

この山行は「成功」である。勿論私はこの山行は自分の思う通りの果を生じな

テント内の暖房はローソクで充分である。一部アルコールバーナーと炭を使つたが息気やCOの過度の状態は皆無用。重量の察から云つてアルコールや炭はローソクに劣る。外気マイナス八度以内はローソクで五度前後、炭で最前廿二度、十八度以上ではハキケを起す事もあり(人による)八度前後が最も良かった。毛布だけでもマイナス三度までは充分なられる。

ウエスリ整備法の欠陥から二日までは使用しなかつた。燃料はガソリン(四エチレン)入の有毒を使用したが別に悪へいは無かつた。

石油カンカマドは五ガロン入の石油カン(缶子ヤのもの)をカマドに改造して使用したが、炭の場合でもまさでも非常に便利であつた。

服装は野人じつらにしろ足らぬ食部隊の引越と間違えられるが、我々びんぼう(井原)にとっては、かけがえのないマット名貴タミなのである。防寒と暖にはもつていのだが、停滞に對しては防寒性が全く欠けてしまつ事と重量とかが意外にあることである。その上スツシニがこの隙間に突さつて見づかきからぬことおびたしい。兵士の四月号ではベニヤ枚のマット代用法(花びニール防湿)が出ている部の器具係一見の要であらう。

ベツク木(板)を切つて雪中に水平にうめるのであるが察察での実験はうまく行かなかつたが、山上では網と共に氷化して定性は充分であつた。尚昨年二月の実験の際に雪干五六氷(廿米と一尺余の降雪でポールが雪中から裂片てしまった。こう云う雪中に居る者はシエラフに入つてみようものぢら身うち(き)一つ出来ぬ。まして灯台もある場合は。この様な際の際の張網とベツクの

網の研究と共に竹製ストックの改造によるツバーク用ポールの研究も始めるべきであらう。又夫藤自身としては出入口がスムーズに改良されたいものである。

アイゼン(普及版四本のもの)を使用した。水で充分向に合う。又八本のも



展望車

七して悪魔は必す口を吐く云々云々。 舟水は川は染しまんかために山へ行く」と。だからいせまゝとと基礎を致されるので、自己の力の正視と自分に対する信と感謝の気持ちがなく、どこに真の楽しい山行があり得るか。

一泊の人間の「快楽が山に於いてなされる時、それ前ち「快楽」は同時に多くの他人（或は他動植物）の種々複雑な犠牲を意味する。それ等のものに対して、我々は、まづ感謝の念をささげねばならない。又同時に己も共同体（實際的パーティ行動に於いては）に対して全力をささぐべきであり、これは他から見た犠牲である。又同時に、自身では自己の犠牲を犠牲とは思はねど多くの人間に知らねばならぬと思ふ。此所の手段では唯に自己の利害にのみ気をとられてゐる人間は生かす得ないはずである。まず無我からの出発である。メンバーシップも限定的に此前に起す、又この無我も更に限定的には自己の力の正視と覚の上になつたものと云つて可い。

讀は合度が決定にもどるが、準備殊に準備中の研究会を導くものと主張した連中も今回ばかりとこの誤りさみせつけられたはずである。かかるに反省会たるや「人取次書」しか出来ていない。救済にわたる準備会研究会も決定に出来ぬ——平均二〜三人出席——旅のむのが自己のみならず、自然を、染しみの本源である山行を正しく視、覚り、準備中の活動正しく評価し得ることには出来ぬ。尤も自己の正視なくして訓練やトレーニングも必要なく山行し得ると云う者が非常に多い。準備中の云々種類の動向が本人として、どのくらい位の位置（或は程度）にあるかは平沢の文によく出てゐるが、こゝまうのこゝ一般には意味と云つのである。意味は、ある事件、事象に対する正視の開放させるドグマナズムに

○わがが十三貫しかないの下の人が百貫百貫買った事があるとあつては、可能に檢査体重もみる也」と云はれては除算も同定するわけにもゆかず、ハカリに交々乗つては細々と計算するうちに、一人だけどうしても、ハカリにのりたがらないのがいた。新の日の下、知る人ぞ知る一九貫。

○の原諒聲だて、……四十代のスチーヤ（婦人）口ぢらえ、N「銀鉄です」すでにウソはほつた。N「あなた方は」「万座です」N「あせこはい、です」N「……ウソは白熱化した。婦人「梅田の下りてどのコースさ」N「胸まはつてせきほらい一番、コト昔ながら北上します」……

○同じく婦人「今はどの丸い指鼻が流行つていますね」N「えー」車中の一人一せりに注目す。「こゝは鍋アタですよ」婦人「この水方一とおりにして」○満天の星を仰ぐの同食中、タンチフトの表裏代表、死んでしまつたのは板打通流ア、エマシ君、北七七星の一角をミランで、自家の奴はオレが今こんな所で飯を食つて居るが、夢にも思つていないぞうつてホロリ。一同彼にも望

望の心ありやとニヤリとしたと云うウソめやうな嘘をまじり本當の詩。○Cへの途中ラッセラーの、何のひまうしに驚愕。雪を喰つて居るのかと思へば、こは如何に、水筒の桶が頭を打つて雪の上に埋没せしめ、顔面は雪中深くあり、折にとんだソウナンも途であつた。雪中で死す？

○の大昔話で重食と云う争になり、食野のK、ハツクスの口をあげたとたん大型のゴツフェルがとびだした。おさえんとする間もあらはこそ、ゴツフェル氏の彼のキヤビラシの音を軽やかに日川側へころは始めた。N「かたが長うかアイゼンのため思う旅に走れず、長大な急斜面の危険となる。平行になつた下ま

まにアイゼンとせんとする所、ゴツフェルはタックルの下まづつて大きなバ

バ

するに大であることなるまなひ。無算(和)を我々は信ずるには  
当らぬ。ただ未知を嫌慕すれば良いのである。我々自身が未知であるか  
らぬ。要は知見への努力である。行齋への科学性の要求である。即ち凡  
ゆる条件を正しく判する事によって自己の知るべきを果す絶えざる  
努力に他な<sup>ら</sup>ぬ。

今度の山行もこの重大な我々の高感スホーリキソンの主体性を、すなわ  
れてしまっているのではないか。まだ理解を成していないのであったならば、  
緊急に研究会が必要である。これも燃焼してしまつていけるはずだ。反省会  
は燃るとすべからず。五月の公式山行にも必ず失敗する。

計算が立てられたときからするに云つて来たメンバーシップを、再び  
「失敗」の評としてとりあげ、ひいては自己のパワーの論議にまで入つ  
てしまつたが、くどくどもう一度言うならば、力の正視は、自己に對する  
赤裸々な心の結核がなければならぬ。魂心とは、不理性の自我と  
虚構によつて必死以上に誇大されたアタマと、自然に對するはつきり上  
しに悔意を失つた不安定な肝で、經驗を經驗と取り得ないフラックの足  
とからなる超火災人的存在でないことである。史軍人になつてしまつと  
一度奮闘すると座に他人が転倒してゐる種に見える。立とうと思つても  
足のくせは、まことになほり切らぬ。自分の經驗から云つてゐること  
だからたしかだ。それでも君達が、僕の評するメンバーシップがわづら  
わくれば、又また安易な要求めんとするならば、僕は即ち動<sup>機</sup>を失つて  
燃を燃やとする。「田五郎の看板を保存会に返上して、直ちに旅行  
会に加入せよ。」

文化家を舞せられた山岳部だ。残つた現勢がたんでほつとするのか  
。他方本願で自分らない、御此岸あつたこの彼岸だ。純心さに歸れた自力

、ウインドして熊本の森林帯深く没していった。

の深層に個人は牛ノ根の分水嶺も自ら共に前夜の姿も懐かたかならず。全員  
激水ばかりに溺れて二歩一歩ラッセルしながら進歩。トツスラッセルの  
音が突然立ちこめて「熊だ」と云う。前の者はあたまを打つてとまる。前の  
方から皆熊だと言ふ。段上に立つている」と云う。少しは眼がわるいから暗ま  
すかして見てもわからぬ。はては「ナタを出すと云ひ出す者もある。しか  
し盛にしが「真直に進め」と云ひ、が全員一歩一歩小室川側につき出し、知ら  
ずく捲いて行く。面白い事に、右足するに従ひタマと熊かたぐいと長くな  
り遂に一寸坂々までになつてしまつた。熊が突かれぬ悲劇であつた。

註：未だにNとSは熊であると云つてゐるし、熊のフンを見た者もあると云  
から全面的には否定しようとはしない。 N H K

のころのテント火事のときのこと、食料のN、Sは皆見つけて「カジダレ  
とどかつてテントきた、きはじめた。同時に又少しが「全員起きろ」といなるが  
わえといふ当の住人がさつぱり起きるといひ、如何にと気かかへば出口にあ  
る後のスソをめぐつて出ようと試みている。ところがヤツがしつかり打つて  
あるたは頭を出ても肩が出ず、もがき続けるニエウタイを煮じてしまつた。  
これも又とんだソウナン系だ。絶死？

の末川について一行、「失敗ソバ」のもと、駅に入つてゐる電車を乗るがし  
て幾々とソバ屋へ向つたが、「本日休業」。さび電車にと駅へ走つて、あと一  
歩、おどかりし。電報は一同まじりぬいで行つた。失敗の連続とい  
らだ、せるに余りある失敗であつた。

本願でなければならぬ。現勢の迷かた大我に立つて、まず電報機を考  
察するのを要求して、今山行の評のくくりとしたい。(注)





# 志賀スキー紀行

山口雄弘

湯田中からバスは皆打まで登ったが客が少いせいか、時間の具合がゆるく大分予定より遅れたので温泉を通ろうと考えていたが雪崩川せうたので丸池へまわる。二十ばかり積った新雪が靴の下でキタカハル秋よい。

くづついていた天気も五郎平茶屋から本格的に晴れて来た。丸池ヒュッテまで戻りてリフトを右手に見て登る。二三日前に降った雨で全体でケレン系の状態は大分悪い。この辺りではスキーもさつける。大分静かの吸った志賀ヒュッテまで登る頃から吹雪は幾分弱まったが平床にかゝると瓦が強く当る。春の吹雪が大分静か狂う。十二時すぎに麓の湯へつく。

あくる日は快晴。午前中から横手山往復に出かける。相もかわらず「のまき」からの展望はすばらしい。徳美が巨岳の左の肩越しに遠光に光る千曲川が流れている。アルカスは雲の中。のまきから小屋からは山頂までカチカチに氷つていてシールもさかすスキーをかついで登る。

さすがは志賀高原だけあって春と云って木々の姿はよい。樹木がすばらしい。三角尖からは、根子、吾妻がすぐ右手に正面には浅間、そのうしろにかすかに富士がどの景色の姿を見せている。白根の噴煙も美しい。瓦が独りので長くも尾を引かず直ぐ下る。頂上から、のまき迄のアイスパーン

## 祝

三月七日に進行された廿六年度卒業式に於いて、我部オセ代(し)中野氏は、運動部中唯一人、文化賞を授けられた。

は手古する。エツチが一向にきかす一気に入米も減りこしまつ。小屋まで廿分かつたが、のまきからは十五分下る。雪質が悪くて快適ではなかつた。熊の湯はゆるくて入るに足らないが、静かである。またな

四日目は午前中から鉢山へ行く。のまきから小屋から横手の北側を少し捲き真直に草津峠へ下る。林間道をたが又特にギヤツクが多く雪が重いのでヒナのバネと脚のバネが疲弊された。途中から又吹雪いて来るとの上指直標も草津峠までは無いので大分時間かかつたが鉢山からは木の向もよくなり指直標も確実になる。前山の上段では雪も止み、都合よく居る。想いもよらぬ景色の山々に今更ながら感激の産を放つ。今まで絶望していた雪も廿三日には三月の暴吹雪で気持も下り思ひかけぬ粉雪になった。

あくる廿四日は絶望の兆候散々。午前中に君がスキーを折つて出立がおく。横手までの登りもいつもの空身ではなく荷が重いので大分苦しい。が昨日の降雪で頂上までシールがきいた。出る時は標頭だったのが頂上に立つと又吹雪いて来たがシールをはずして新装成った氷跡のスキー小屋まで秋首を五六分ほどはす。晝食をすませて、ゆるい登りをワックスをさかして登る。

山田峠までは全部尾根越して天気は佳ければ迷う心配はないが吹雪の中、夜尾根に入り込んで指直標を越すのに一苦労する。此山脈は又晴天に恵まれ横手の横ゆりが裏面に輝き白根の噴煙も大分近しい。峠の切りは漆烏地帯で枯死した木が美味わるくニョキ／＼と立って居る。峠からは右手の沢と林間道を走れる。雪も良いのでスキーも気持ちよく廻る。砲撃の備けひが野をたつ。園には万葉の屋根が見え、今日半日のツチノシロ終り三十分には風呂

に入ることが出来た。梯盤登では客が我々三人だけなので本意旅館が馬鹿に淋しかった。この湯は猛烈にあついのに入る前にヒキケで入奮闘しないとい入れないが静かだ。湯感のよい山湯である。夜更けてランチの光で風呂に入る頃には、又しても、気味の悪い音を立て、吹雪いて来た。更に気狂いどみた春の雪である。

朝になつても吹雪はますます強く降りかかるばかりであった。湯船を煮えたが、この死んだ様な静かな旅館にいるのも退屈の極であることにする。丁度山田温泉へ下る番頭が居たので案内された。外へ出ると思つたよりもすこい強風だ。自分のつけたシューズが気味のわるい程サツと滑る。春の山と思つて油断した、ゆ毛袋とヤッケとの間の服が鼻血に打つてしまつたが代りもない。どうし林はない。刀本隊は三十分。シューズははずす手も自由に動かない。峠の雪底を履き歩くには尻に飛ぶ程に何回も滑つた。峠を越すと尻が真正面に吹きつける。まつばに氷がついて尻から氷が出て前が見えない。いわゆる二十九曲りはスキーを新ては一大事と慎重にキツケターンを繰り返す。峠を越すと少し下の小屋につくが雪がつかうすより内のはあそこと力を合せて、やっと半分ばかりこぎあける。火にあたつて人も熱がした頃、こみからが難所だと云はれてヤッコとする。せこからは水面から三〇米位の所に二時間はかり斜降定の連続。その上新雪の層を登る。その一層が驚きと解けない。つい最近に遭難者が出たと云う二十坪の難所も無事に通過し、夫れの日三倍の時間をかけて七時過ぎにつく。やつと重荷をどかしてみる。猛烈に腹がへる。着て見ると山田に雪がたつたつと滑り出し拵だすに似たからだ。上味を食ふたかつたがもう一息ある山田までとぼすことにした。七時過ぎの小屋を乗り出して嵐の辺のバス道を通る。やはり

十米位の崖なので気が許せない。だんだん傾斜はゆるく、おろそスキーが滑らなないので五色温泉でワックスをぬりかえる。

矢張り雪で半かしか滑らない戸から家の内へスキーを引いてフトフトと出て来る。雪は積つたが凡そ来た。同じ道を通る。今度滑るスキーで十五分山田温泉につく。

三人共どうやら向に合つた最後のバスに乗る。おれは「今日山田温泉」と云つて旅館に上りこんだ。山田温泉の共同浴へ行つて見ると近在のお百姓さんが大勢来ていた。九割まで浴槽から後光を浴して居るのを見て二人に「おい、この湯はハゲる湯だ。おれはもうな」と云つて鬼の手頭を手にやつた。

こゝも又人柄の差が分かれる温泉場である。最後は道順が更であつたが野次入行く、もう更が下ると春なので雪が厚く一日居て温泉する。ついでに開放しておくがスキー場の温泉町では野次が一巻である。

# たわごと

平澤 勇

新人・現役のため

今更らぬが、昔と云う事は、至極当り前の事として取り扱はれている事だ。その事、理解して讀むと思ひます。そして、理解出来ないと、私達の素直ではなくて、むしろ、自身の純心々の向極なのです。今更此の事、文をきかぬは、口をいふと云う事は、如何にも、思はれるかと云はれませんが、こゝろが、我々の思ふは、この一見、馬鹿らしいと思はれることを、思はれているのです。





二十六年度山行総覧

鉦尾根

期日 四月五日

パーティ 丁内 日下

コース 登野―鉦尾根―天世山―大ツワ

峠―小宮浦

川寄山・市道山

期日 四月八日 曇

パーティ 村田博之 他一名

コース 本郷―川寄山―市道山 社田峠―

藤野殿

川苔山

期日 四月九日

パーティ 田中実

コース 川苔谷出合―百尋滝―横ヶ谷小屋

跡―川苔山―舟井戸―榎沢

戸倉三山―陣馬山

期日 四月八日

パーティ 長崎 笹田

コース 倉瀬―伝巻沢―石汐沢―尾根―

川寄山頂―金塊沢―イツボテ山―

陣馬山頂―明毛峠―耳瀬

35回

川苔山集中登山 川村田

期日 四月二十二日

① 川苔谷林道

パーティ シ中野 南谷 姫富田

コース 川苔谷出合―百ヒロの巻―

横ヶ谷―川苔山

② 直名井沢

パーティ 山森沢 岩堀 林 姫神島

コース 川名駅―直名井沢出合―魚

止の巻―二岐―赤尾根―

川苔山

③ 曲ヶ谷沢

パーティ 鈴木 佐藤 平次(部)

コース 川井―大坪波―曲ヶ谷沢―

川苔山

④ 入川谷

パーティ シ田中実 山田 福田

コース 古里―魚止巻―徑に出る―

舟井戸―川苔山

⑤ カロロ

パーティ シ笹田 長崎 加藤

コース 大塚―日原 日原ヒユツテ泊

―カヒロ出合―仙元峠―ソ

バツツ山―川苔山

◎ 痛露

パーティ 村田 野口 戸田

コース 古里―伝巻沢の頭―川苔山

コース 川苔山―舟井戸―大根の山の

神―鳩の巻

鋸・大岳・御岳・縦走

期日 五月三日 晴時々曇

パーティ 佐藤 他二名

コース 氷川―舟大橋―大ツワ―大

岳―御岳―御蔵

36回 茅倉尾根

期日 五月十三日

パーティ シ林 下出 戸田 斎藤 川村

コース 御蔵―御岳神社―大岳小屋

―ツツラ岩―馬頭山―十里

木―五日市

37回 水無川本谷

期日 六月十七日

パーティ シ加藤 笹田 平次

コース 遊沢―大倉―本谷―塔ヶ岳

―大倉

38回 水無川本谷

期日 六月二十四日

バーチ 山口 長崎 田中 岩堀 河合 下

出 関谷 香藤

コース 遊歩—大倉—本谷 塔ヶ岳—大倉

### 谷川岳西照沢

期日 六月十七日 晴後雨後晴

バーチ 鈴木 田中東

コース 土合—山の家—洞沢出合—尾根

—氷上山—ザンゲ岩—翁オキの

耳—肩の小屋—天ヶ岩—尻出し

岩—天神峠—天神小屋—谷川温

泉—水上

### 39回 奥秩父主脈縦走

#### ① 縦走班

期日 七月十四—十九日

バーチ 山田中東 SL佐藤信治 SL平塚勇 M

山口雄弘 笹田英次 森永花治 上崎

止鷗 北藤登夫 岩堀中三 河合義敏

佐藤亮弘 林武志 福田宏二郎

コース 期日 信濃川上—信州峠—黒森—

金山—就寝

オ二日 富ま見—六日岩—五丈

岩—朝日岳—大池小屋泊

オ三日 雨後晴—北嶺全丈—国師—甲武

信—小屋

オ四日 晴—経平—破丸—雁坂峠—

雁峠—將監峠—將監小屋

(小屋にて柳沢班と合流)

オ五日 晴—大タルミ—春岩—雲取

小屋跡

オ六日 晴—雲取山頂—掬坂—セツ

石—三木戸山の肩—氷川

#### ② 柳沢班

期日 七月十七日—十九日

バーチ 山村野 野口 泰下

出 関谷 戸田 香藤

コース 塩山—番屋—柳沢峠—

葉合—一之瀬—將監小屋

オ二日 大タルミ—亮岩—雲

取小屋泊

オ三日 雲取山頂—セツ石—氷

川

#### ③ 菅林署の天

期日

バーチ 田中將利 長崎

コース 三雲沢出合—源流—縦走

路—甲武信雲—甲武信小

屋 以後縦走係と合流

田中將利 森沢 以上二名は雲取小屋上

り柳沢峠を経て塩山に下る

### 40回 ハケ岳主脈縦走

期日 八月三日—四日

バーチ 山岩嶺 河合 下出 関谷

コース 小淵沢—鴉山—権理—加

大キレット小屋泊—中岳—赤

岳—猿黄小屋—猿黄岳—夏

沢峠—本木温泉—松原湖駅

### 雲取山—將監峠

期日 八月三日—七日

バーチ 林 他八名

コース 氷川—鴨沢—セツ石小屋泊—

雲取山—猿平—大タルミ小屋

泊—將監峠小屋—三之瀬—

岩合—丹波泊—氷川

### 大菩薩嶺

期日 八月十三日—十四日

バーチ 名倉

コース 塩山—上日川峠—小屋泊—

石丸峠—大菩薩嶺—初鹿峠—

### タル沢

期日 八月二十日 雨後曇

バーチ 田中東 佐藤 権野

コース 氷川—大峠—タル沢小屋—

一 支流出合ー六ツ石ー氷川

### 大黒茂谷下降

期日 八月二十六ー二十八日

パーティ 平沢勇 長崎正繁

コース 氷川ー三糸橋ー小室川谷ー十丈

宇峠ー大菩薩嶺ー大黒茂谷最低鞍

部ー伏流ー停止設置(泊)ー泉水

谷出合ー泉水小屋ー丸川峠ー塔

合ー塩山

### 41回 塔ヶ岳集中登山 C.L 加藤

期日 九月二十二日ー二十四日

#### ① 勘七次

パーティ L 岩堀 窪田 肉谷 下出

#### ② 水無川

パーティ L 福田 田中 島田 鈴木 林

#### ③ 源次郎次

パーティ L 加藤 平沢 田中 飯塚

河村

コース 塔ヶ岳にて三パーティ合流ー並行小

屋泊(岩堀 窪田 平沢 田中)

河村は大倉尾根を下降ー丹沢

山ー蛭ヶ岳ー焼山ー五瀬

### 小佛峠

期日 九月二十四日

パーティ L 肉谷 田中 平沢 林 下出

加藤

コース 五瀬ー小佛峠ー高尾山ー浅

川

### 三尾根から鍋割尾根

期日 八月十九日 十九日

パーティ 岩堀

コース 菩提ー三本松ー二塔ー塔

鍋割山ーミツヒ天出合ー勘七

### 42回 ツヅラ岩

期日

パーティ L 平沢 笹田

コース 五日市ー本宿ー千足次

茅倉橋ーツヅラ岩ー富

士見合ー千足

### 43回 大菩薩嶺

期日 十月十三日ー二十四日

パーティ L 加藤 S.L 岩堀 林 篠藤

泰福田 下出 戸田 肉谷

斎藤

コース 氷川ー丹波ー三條小屋

小室川出合ー大黒茂谷

一 泉水谷造林小屋(泊)ー十文字峠

一 丸川峠ー大菩薩嶺ー大菩薩峠

一 上日川峠ー番屋ー塩山

### 十文字峠より金峰山

期日 十月二十三日ー二十六日

パーティ 中野 鈴木 田中

コース 信濃川上ー梓山ー八丁坂

才一日 信濃川上ー梓山ー八丁坂

才二日 大山遊道ー大山ー三室山

田武信岳ー竈見ー石塔尾根

入口ー西天入口ー国郎岳

大蛇小屋(泊)

才三日 朝見岳ー金峯山ー片手通

塩山分岐ー水龍峠ー一本松林

場ー上野平ー白岳ー天神林

才四日 バス 甲府

### 三頭山

期日 十月二十二日

パーティ 岩堀

コース 河内ー教養峠 西峰ー教養峠

御前山ー氷川山庄泊

### 越次 (才一次偵察)

期日 十月二十五日

○山行総覧につづく。

### 川苔桂谷

期日 十月二十四日

パーティ 田中

コース 米川→川苔本谷→桂谷→盛地谷

川苔山→鳩ノ巣

### 武甲山

期日 十一月三日

パーティ 河合他

### 三ツ峠

期日 十一月三日

パーティ 鈴木他 (ハレト部ハイキング)

### 越沢バツトレス

期日 十一月四日

パーティ 田中、平沢

コース 越沢→琴平山→西壁→大塚山→バツトレス→鳩ノ巣

### 陣馬山

期日 十一月二十三日

パーティ 佐藤他二名

### 海沢

期日 十一月二十六日

パーティ 下出、戸田、福田、福田、旭多敷

### 火打石谷

期日 十一月二十三日

パーティ 田中、平沢、河合、林

コース 米川→火打石谷→川苔山→鳩ノ巣

### 御前山

期日 十二月二十八日

パーティ 福田

コース 御岳→大森→繪巻山→藤堂→米川

### 牛ノ根偵察

(A) 期日 十二月二十三、二十四日

パーティ 上岩塚、鈴木、南谷、斎藤

コース 塩山→菅屋→大菩薩峠→石丸峠

牛ノ根→大マドイム→小管村→米川

(B)

期日 十二月二十三、四日

パーティ 上笹田、原孫、松崎

### 鋸尾根

期日 十二月二十四日

パーティ 田中、平沢

### 五色スキー

期日 一月

パーティ 川合他

### 44回 七ツ石山

期日 一月六日、八日

パーティ C、加藤、北平沢、笹田、佐藤他

河口、飯塚、川村、林

コース 米川→原田→鷹塚→堂所峠→七ツ石山→鷹沢

### 逆川谷

期日 一月二十五日

パーティ 田中、平沢、田中

### 45回 川苔山

期日 二月三日

パーティ C、福田、北平沢他、北園、田中

森、戸田、早良、斎藤、下出

### 赤杭尾根

期日 二月十七日

パーティ 福田、下出

### 46回 多摩南陵

期日・パーティ 報告は省略します。

### 訂正

川苔桂谷及び三ツ峠は参加者、都度外の予定をもつて、ここに訂正す。

# 踏 跡

昭和廿六年度

我部は御存知の通り昭和廿二年九月体育会山岳部として認められた。他校山岳部に比してや、古い歴史を有しながら、部の基礎の確立が一ヶ年ないし二年おれてしまった。これは一つに校内に対するスポーツとばかりに熱心な発展の気志のみで専ら世に華は確かであるが部の内部一般としての働きかけを行ななかつたことにある。此所には救に於いて廿六年度を度しては、まことにバラバラであった。廿五年度が山行回三ヶ年の記録をもち出してみたが、だれにでも解るやうに廿四年度以来本部の山行形態の急激な変革があると云うことである。廿五年度春以来公称山行回数が当時の二年部員によつて増増した。これは今まで停滞して来た部に對して醒めて来たのである。廿六年度は更にこの急激な変革が更に進んだ。廿六年度は更にこの急激な変革が更に進んだ。

## 第一表 月別山行記録 (一九四九—一九五一年)

月	山行回数 (公式山行)	山行延日数	参加人員 (部員)	部員係者 (月)	一般生徒 (印刷部)
四月	〇	七(七)	六(三)	〇	〇
五月	一(一)	五(二)	一(一)	〇	〇
六月	〇	〇	〇	〇	〇
七月	一(一)	六(四)	八(二)	〇	〇
八月	五(五)	一三(一)	一七(二)	〇	〇
九月	〇	三(二)	六(二)	〇	〇
十月	一(一)	三(三)	六(三)	〇	〇
十一月	〇	三(五)	五(一)	〇	〇
十二月	〇	〇	〇	〇	〇
一月	〇	四(三)	三(三)	〇	〇
二月	二(二)	三(三)	二(二)	〇	〇
三月	〇	三(三)	二(二)	〇	〇
合計	一(二)	五(四)	四(一)	〇	〇

参加人員(部員) 部員係者(月) 一般生徒(印刷部)

(廿二頁より一頁) 以上とりとめもなく書きましたが、この夕子はひり五つ無知の朝高は我々一度は確(来)ま(り)るのです。そして後に残る現役の人達に深し(二)度と驚くり返させたくはないのです。

お互に無知から相への懸やくに努力したいものです。

(又) 監査 田中



山行記録回数 四一 公式一三  
 山行延日数 一八三 一六  
 (部員) 一人 新加入  
 公式山行回数 九人  
 一人 新加入  
 部員総計 廿九人とする  
 部員総計 廿九人とする  
 教師参加 皆無 花し



表四 山行日数ベスト20 (1950. 51年比較)

昭和廿五年年度			昭和廿六年年度				
氏名	回数	日数	氏名	回数	日数		
1 田中博之	2	10	21	甲沢 勇	3	14	23
2 田中 実	2	8	20	田中 実	3	11	22
3 鈴木 隆夫	2	9	19	加藤 鈴夫	2	9	22
4 長崎 正昭	2	10	17	笹田 英次	3	10	21
5 森沢 拓治	2	7	17	林 武志	1	9	21
6 谷 河次	2	7	16	岡谷 敏	1	10	21
7 佐藤 隆夫	2	6	16	橋田 隆一	1	10	20
8 田中 実	2	7	15	岩瀬 好三	2	10	19
9 山口 雄弘	3	7	13	山口 雄弘	3	5	19
10 山口 雄弘	2	4	12	下出 鶴彦	1	10	18
11 中野 隆夫	2	7	12	中野 隆夫	3	5	16
12 中野 隆夫	1	5	9	長崎 正昭	3	7	15
13 中野 隆夫	2	3	9	青木 充弘	1	7	14
14 中野 隆夫	2	6	8	佐藤 隆夫	2	5	11
15 中野 隆夫	3	4	8	坂合 充	2	5	11
16 中野 隆夫	2	3	8	戸田 清	1	7	10
17 中野 隆夫	1	4	8	佐藤 隆夫	3	4	9
18 中野 隆夫	2	2	6	川口 宏	3	4	9
19 中野 隆夫	2	2	3	川口 宏	1	3	9
20 中野 隆夫	3	2	4	(田中 実)	1	3	22
				(鈴木 隆夫)	3	8	14

表五 目的地別山行回数

目的地名	回数	日数	人数
1 奥秩父方面	4	19	27
2 奥武蔵方面	16	19	71
3 大菩薩方面	5	13	30
4 丹 沢方面	4	6	27
5 入 岳方面	1	2	4
6 谷川岳方面	1	1	1
7 上越 方面	2	12	2
8 奥武蔵方面	1	1	1
9 中央 沿線	4	4	9

表六 高歩別山行回数

3000m以上	1回
2500 "	3
2000 "	7
1500 "	6
1000 "	27
1000 以下	8

表七 山行日数別延人数

日帰り	27回	175人
二日以上	16回	62人
五日以上	1回	12人

表八 費用別山行回数

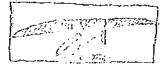
(食費、キセルは考慮せず)	
200円以下	18回
200円以上	25回
500円以上	1回
1000円以上	1回

(基 京西 杖 笠 と し て)

ここ二歩一歩強く  
踏みだす年だ。常  
に踏破をめする  
ことなう。  
(M.T.)

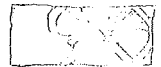
表三 目的地別山行回数

冬山を主とするもの



延 22人  
3回

スキーを主とするもの



延 2人  
2回

縦走を主とするもの



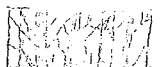
延 73人  
21回

沢尻岩登りを主とするもの



延 54人  
17回

その他



延 20人  
10回

あるが、基礎期間である我々の山行では、部員各自パーティシツスを充分に与えな  
てこの山行に、巨額の費用、二車以上乗車でスムーズに行く山行はない。山行日数の  
方は、前年度に出した方が他校の十位までしか出ていない。小人数の傾向は不明でない  
のが残念だ。中堅一歩一歩の山行日数が増加し十回までの山行が中心ならば、だいたひ部  
の力はかたひ。今までは日補給が我部としては限定的であったが今年あたり四十日  
くらいに終結する可能性が有り、この山行は白人と見ることには否に置かれ、とも  
なうか、あくまでも全体的な数字として価値がある。戦後の都合上詳細の説明は、  
はぐくが煩悶はいつてもうける。廿六年年度の報告は完成した。廿七年度一今年



まことに豫然としておさえたことは事実であるが、我部では夏山と之満足に出来たことはないのがある。今さら大ニ訓をうらんでもしようがないが、中略にこの板が運動部がない上に、白紙のまゝ二年になると、もう危うかしい部の運営の責任を小さく背に背けねばならぬ。やうと部の向標がわかり真剣になる場合は、もうオールド・ボーイズの仲間として扱われる。それでは三年くらいしほられたとして、とて一人まゝにはおられない。火のたき方―基礎があるが―ささえて十年はかゝると云はれているのだ。高橋氏ではないが卒業してもオールド・ボスではなくフレッシュ・ボーイなのである。それでは今までの経験とせの経験を拵つている。それではよりいまだまわりの現役公衆(二年)に全て与へてやる事がなければならぬ。この板にして来たのがNAC(のB有志会)であつた筈である。

〇〇Bの指導と向標に又、現役は若々しさがなければならぬ。若さ、精気のよい青年ではならない。若さには、まず謙虚と云うものがつきものであること、今更さうまじくないことである。主体は、あくまで現役であるのだから、邊歩御座することなく、邊大御座することなく、常にスミ標の自己をかみかめるべきである。常に「謙己を新人の気持ちにすること、純心であること。これは「謙己」の美徳」ではない。自己に對しての正規の意味するのである。これだけは忘れこもらないたいものだ。いつても若々しいフレッシュ・ボーイでありたい。

〇駄文ながら部の前途―今年こそ部の基礎の完成と思う―を祝して、又編纂の一人として、新人のBとして后記にかえたいと思う。

(田中)

〇山岳部廿五年年度卒業のOB藤和彦三氏(一九五〇)は、四月末日死去されました。此所に深い哀悼の意を表す次第であります。尚告別式にはOBより菅野幸夫氏、現役よりくし加藤敏夫君が参列致しました。

今年も、いや今年こそ、若々しくがんばろう。

として

バルクハイル

告、卒業生の皆様へ、NACは一但の山岳会としてばかりでなく、西高卒業生有志の団体でありますので、そのオ一の目標を西高山岳部の積極的指導と致します。〇〇、新しく同志を募つております。連絡は、田中へ、会長表加藤敏夫

部報 彷徨 第九号

昭和廿七年五月廿日 発行 一非志 岳一

発行責任者 加藤 鈴天

編集責任者 斎藤 忠正

印刷責任者 林 武志

岡谷 徹

田中 将和

発行者 東京都杉並区大宮前三ノ一八  
都立 西 高山 岳部

人間の態力は生れつきでは弱い。人間につけられた味  
である。

野菜につけられた味のよさは百姓の腕次第、味となる  
べき肥料をやらぬは味はつかず、やるべき時期を誤つて  
はよい味はつかぬ。

(鈴木煥「才能は生れつきにあらざり」)